

鷗外選集

第二卷

鷗外選集 第2巻 (全21巻)

1978年12月22日 第1刷発行 ©

1979年2月15日 第2刷発行

¥ 980

著 者 ^{もり}森 ^{りん}林 ^た太 ^{ろう}郎

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 ^{株式}岩 波 書 店
^{会社}

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

独身	五
杯	二
牛鍋	二七
電車の窓	三
木精	元
里芋の芽と不動の目	四五
青年	五三
栈橋	三三
普請中	三七
ル・パルナス・アンビュラン	二四五

花 子	二六三
あそび	二七三
沈黙の塔	二八九
解 説	二九

小
說
二

独

身

一

小倉の冬は冬といふ程の事はない。西北の海から長門の一角を掠めて、寒い風が吹いて来て、蜜柑の木の枯葉を庭の砂の上に吹き落して、からからと音をさせて、庭のあちこちへ吹き遣つて、暫くおもちゃにしてゐて、とうとう縁えんの下に吹き込んでしまふ。さういふ日が暮れると、どこの家でも宵のうちから戸を締めてしまふ。

外そとはいつか雪になる。をりをり足を刻んで駈けて通る伝便でんびんの鈴おとの音がする。

伝便と云つても余所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せ

られてゐる二つの風俗の一つである。常磐橋の袂に円い柱が立つてゐる。これに広告を貼り附けるのである。赤や青や黄な紙に、大きい文字だの、あらい筆使ひの画だのを書いて、新らしく開あけた店の広告、それから芝居見せものなどの興行の広告をするのである。勿論柱は只一本丈であつて、これに張ると、大門町の石垣に張る位より外に、広告の必要はない土地なのだから、印刷したものより書いたものの方が多い。画だつても、巴里の町で見る *affichage* のやうに氣の利いたのではない。併し兎に角広告柱がある丈はえらい。これが一つ。

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephan が警察国に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから、手紙の往復に不便はない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用辨の事である。一日の間の時を以て算する用辨を達するには、郵便は間に合はない。

Rendez-vousをしたつて、明日何処で逢はうなら、郵便で用が足る。併し性急な恋で、今晚何処で逢はうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある。その上厳めしい配達の為方が殺風景である。さういふ時には走使が欲しいに違ない。会社の徽章の附いた帽を被つて、辻々に立つてゐて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買つて邪魔になるものを自宅へ持つて帰らせる事でも、何でも受け合ふのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わつてゐる紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云つてゐるのが、この走使である。

伝便の講釈がつひ長くなつた。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりと急調に聞えるのである。

それから優しい女の声で、「かりかあかりか、どつ

こいさのさ」と、節を附けて呼んで通るのが聞える。植物採集に持つて行くやうな、ブリキの入物に花欄糖を入れて肩に掛けて、小提灯を持つて売つて歩くのである。

伝便や花欄糖売は、いつの時候にも来るのであるが、夏は辻占売なんぞの方が耳に附いて、伝便の鈴の音、花欄糖売の女の声は氣に留まらないのである。

こんな晩には置炬燵をする人もあらう。併し実はそれ程寒くはない。

翌朝手水鉢に氷が張つてゐる。此氷が二日より長く続いて張ることは先づ少い。遅くも三日目には風が変る。雪も氷も融けてしまふのである。

二

小倉の雪の夜の事であつた。

新魚町の大野豊の家に二人の客が落ち合つた。一人

は裁判所長の戸川といふ胡麻塩頭の男である。一人は富田といふ市病院長で、東京大学を卒業してから、此土地へ来て洋行の費用を貯へてゐるのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川といふ若い医学士に跡を譲つて、出発すると云つてゐる。富田院長も四十は越してゐるが、まだ五分刈頭に白い筋も交^{まじ}らない。酒好だといふことが一寸見ても知れる、太つた赭^{あからがほ}顔の男である。

極^{ごく}澹泊な独身生活をしてゐる主人は、下女の竹に饅頭の玉を買つて来させて、台所で煮させて、二人に酒を出した。此家では茶を煮るときは、名物の鶴の子より旨いといふので、焼芋を買はせる。常磐橋の辻から、京町へ曲がる角に釜を据ゑて、手拭を被つた爺いさんが、「ほつこり、ほつこり、焼立^{やきたて}ほつこり」と呼んで売つてゐるのである。酒は自分では飲まないが、心易い友達に飲ませるときは、好^{すき}な饅頭を買はせる。これも

焼芋の釜の据ゑてある角から二三軒目で、色の褪^さめた紺暖簾に、文六と染め抜いてある家へ買ひに遣るのである。

主人は饅頭丈^{しやうばん}相伴して、無頓着らしい顔に笑^{あみ}を湛へながら、二人の酒を飲むのを見てゐる。話はしめやかである。只富田の笑ふ声がをり／＼全体の調子を破つて高くなる。この辺は旭町の遊廓が近いので、三味や太鼓の音もするが、余程鈍く微かになつて聞えるから、うるさくはない。

竹が台所から出て来て、饅頭の代りを勧めると、富田が手を揮つて云つた。

「もう行^いけな。饅頭はもう御免だ。此家にも奥さんがゐれば、僕は黙つて饅頭で酒なんぞは飲まないのだが。」

これが口火になつて、有妻無妻といふ議論が燃え上がった。此部屋で此等の人の口から此議論が出たのは、

決して今夜が初めではない。

主人が帝国探炭会社の理事長になつて小倉に来てから、もう二年立つた。その内大野の独身生活は小倉で名高いものになつてゐて、随つて度々問題に上る。

主人は全く女といふものなしに暮らしてゐるのだから。富田も此問題の爲めに頭を悩ました一人である。そこでかう云つた。

「どうも小倉には御主人のお目に留まつたものがないさうだ。多分馬関だらうと思つて、僕は随分熱心に聞いて廻つたのだが、結果が陰性だつた。」

「随分御苦労なわけだね」と、遠慮深い戸川は主人の顔を見て云つた。

主人は只にやりにやり笑つてゐる。

富田は少し酔つてゐるので、論鋒がいよいよ主人に向いて来る。「一体ここの御主人のやうな生活をしてゐられては、周囲の女の爲めに危険で行けない。」

「なぜだい、君。」

「いつどの女とどう云ふ事が始まるかも知れないんだからね。」

「丸で僕が Don Juan でもあるやうだ。」

戸川は主人の爲めに氣の毒に思つて、半ば無意識に話を外へ転じようとした。そして持前のしんねりむつくりした様子で、妙な話をし出した。

三

戸川は両手を火鉢に翳して、背中を円くして話すのである。

「そりやあ独身生活といふものは、大抵の人間には無難に為遂げにくいには違ない。僕の同期生に宮沢といふ男がゐた。その男の卒業して直ぐの任地が新発田だつたのだ。御承知のやうな土地柄だらう。裁判所の近処に、小さい借屋をして、下女を一人使つてゐた。」

同僚が妻を持てと勧めても、どうしても持たない。なぜだらう、なぜだらうと云ふうちに、いつかあれは吝嗇なのだといふことに極まつてしまつたさうだ。僕は書生の時から知つてゐたが、吝嗇ではなかつた。意地強く金を溜めようなどといふ風の男ではない。万事控目で踏み切つたことが出来ない。そこで判事試補の月給では妻子は養はれないと、一図に思つてゐたのだらう。土地が土地なので、丁度今夜のやうな雪の夜が幾日も幾日も続く。宮沢はひとり部屋に閉ぢ籠つて本を読んでゐる。下女は壁一重隔てた隣の部屋で縫物をしてゐる。宮沢が欠をする。下女が欠を噛み殺す。さういふ風で大分の間過ぎたのださうだ。そのうち或晩風雪になつて、雨戸の外では風の音がひゆうひゆうとして、庭に植ゑてある竹がをりをり箒で掃くやうに戸を摩る。十時頃に下女が茶を入れて持つて来て、どうもひどい晩でございますねといふやうな事を言つて、

暫くもぢもぢしてゐた。宮沢は自分が寂しくてたまらないので、下女もさぞ寂しからうと思ひ遣つて、どうだね、針為事をこつちへ持つて来ては、己は構はないからと云つたさうだ。さうすると下女が喜んで縫物を持つて来て部屋の隅の方で小さくなつて為事をし始めた。それから下女が、もうお客様もございますまいねと云つて、をりをり縫物を持つて、宮沢の部屋へ来るやうになつたのだ。」

富田は笑ひ出した。「戸川君。君は小説家だね。なかなか旨い。」

戸川も笑つて頭を搔いた。「いや。実は宮沢が後悔して、僕にあんまり精しく話したもんだから、僕の話もつひ精しくなつたのだ。跡は端折つて話すよ。併しも一つ具体的に話したい事がある。それはかうなのだ。下女が或晩、お休なさいと云つて、隣の間へ引き下がつてから、宮沢が寐られないでゐると、壁を隔てて下

女が溜息をしては寝返りをするのが聞える。暫く聞いてゐると、その溜息が段々大きくなつて、苦痛の爲めに呻吟するといふやうな風になつたさうだ。そこで宮沢がつひ、どうかしたのかいと云つた。これ丈話してしまへば跡は本当に端折るよ。」

富田は迎山な声をした。「おい。待つてくれ給へ。序に跡も端折らないで話し給へ。なかなか面白いから。」声を一倍大きくした。「おい。お竹さん。好く聞いて置くが好いぜ。」

始終にやにや笑つてゐた主人の大野が顔を蹙めた。戸川は話し続けた。「どうも富田君は交^{まぜ}つ返すから困る。兎に角それから下女が下女でなくなつた。宮沢は直ぐに後悔した。職務が職務なのだから、発覚しては一大事だと思つたといふことは、僕にも察せられるところだ、下女は今まで包^{つつ}ましくしてゐたのが、次第にお化粧をする、派手な着物を着る。なんとなく人の

目に立つ。宮沢は気が気でない。とうとう下女の親許へ出掛けて行つて、いづれ妻にするからと云つて、一旦引き取らせて手当を遣つてゐた。そのうちにどうしようと思つたが、親許が真面目なので、どうすることも出来ない。宮沢は随分窮してはゐたのだが、ひど算段をしてでも金で手を切らうとした。併し親許では極^きまつた手当の外のものはどうしても取らない。それが心^{しん}から欲しくないのだから、手が附けられない。とうとうその下女を妻にして、今でも其儘になつてゐる。今は東京で立派にしてゐるのだが、なんにしる教育の無い女の事だから、宮沢は何かに附けて困つてゐるよ。」

富田は意地きたなげに、酒をちびちび飲みながら冷かした。「もうおしまひか。竜頭蛇尾だね。そんな話なら、誉めなけりやあ好かつた。」

四

この時戸口で、足踏をして足駄の齒に附いた雪を落すやうな音がする。主人の飼つてゐる「Jean」といふ犬が吠えさうにして廃して、鼻をくんくんと鳴らす。竹が障子を開けて何か言ふ声がする。

間もなく香染の衣を着た坊さんが、鬚の二分程延びた顔をして這入つて来た。皆の顔を見て会釈して、「遅くなりまして甚だ」と云ひながら、畳んだ坐具を右の脇に置いて、戸川と富田との間の処に据わつた。

寧国寺さんといふ曹洞宗の坊さんなのである。金田町の鉄道線路に近い処に、長い間廃寺のやうになつてゐた寧国寺といふ寺がある。檀家であつた元小倉藩の士族が大方豊津へ遷つてしまつたので、廃寺のやうになつたのであつた。辻堂を大きくしたやうな此寺の本堂の壁に、新聞反古を張つて、この坊さんが近頃住ま

つてゐるのである。

主人は嬉しさうな顔をして、下女を呼んで言ひ附けた。

「饅飩がまだあるなら、一杯熱くして寧国寺さんに上げないか。お寒いだらうから。」

戸川は自分の手を翳してゐた火鉢を、寧国寺さんの前へ押し遣つた。

寧国寺さんは殆ど無間断に微笑を湛へてゐる、瘦せた顔を主人の方に向けて、こんな話をし出した。

「実は今朝托鉢に出ますと、豎町の小さい古本屋に、大智度論の立派な本が一山積み重ねてあるのが、目に留まつたのですな。どうもこんな本が端本になつてゐるのは不思議だと思ひながら、こちらの方へ歩いて参つて、綿町の通を且過橋の方へ行く途中で、又古本屋の店を見ると、同じ大智度論が一山ここにも積み重ねてある。その外法苑珠林だの何だのと、色々あるので

す。大智度論も二軒のを合せると全部になりさうなの
ですな。」

主人は口を挟んだ。「それぢやあ態と端本にして分
けて売つたのでせう。」

「お察しの通りです。どこから出たといふことも大
概分かつてゐます。どうかすると調べたくなる事もあ
る本ではあるし、端本にして置けば、反古にしてしま
はれるのは極^きまつてゐますから、いかにも惜しうござ
いますので、東禅寺の和尚に話して買うて置いて貰ふ
ことにして来ました。跡に残つてゐる本のうちには、
何か御覧になるやうなものもあらうかと思ひましたの
で一寸お知らせに参りました。」

「それは難有う。明日役所から帰る時にでも廻つて
見ませう。さあ。饅飴が冷えます。」

寧国寺さんは饅飴を食べるのである。暫くすると、
竹が「お代りは」と云つて出て来た。そしてお代りを

持つて来るのを待つて、主人は竹を呼び留めた。

「少し此辺を片附けて、お茶を入れて、馬関の羊羹
のあつたのを切つて来い。おい。富田君の処の徳利は
片附けては行けない。」

「いや。これを持つて行かれては大変。」富田は鰻
のやうになつた手で徳利を押へた。そして主人にかう
云つた。

「一体御主人の博聞強記は好いが、科学を遣つてゐ
る癖に仏法の本なんかを読むのは分らないて。仏法
の本は坊様が読めば好いではないか。」

寧国寺さんは饅飴をゆつくり食べながら、顔には相
変らず微笑を湛へてゐる。

主人がかう云つた。「君がさう思ふのも無理はない。
医書なんぞは、医者でないものが読むと、役には立た
ないで害になることもある。併し仏法の本は違ふよ。」
「どうか知らん。独身でゐるのさへ変なのに、お負

に三宝に帰依してゐると来るから、溜まらない。」

「又独身攻撃を遣り出すね。僕なんぞの考では、さう云ふ君だつてやつぱり三宝に帰依してゐるよ。」

「かう見えても、僕なんかは三宝とは何と何だか知らないのだ。」

「知らないでも帰依してゐる。」

「そんな堅白異同の辯を試みたつて行けない。」

主人は笑談のやうな、真面目のやうな、不得要領な顔をしてこんな事を言つた。

「さうでないよ。君は科学科学と云つてゐるだらう。

あれも法なのだ。君達の仲間で崇拜してゐる大先生があるだらう。Authoritaeten^{アウトラッテエテン}だね。あれは皆仏なのだ。

そして君達は皆僧なのだ。それからどうかすると先生を退治しようとするねえ。Authoritaeten-Stuermerei^{アウトラッテエテンスチュエルメライ}といふのだね。あれは仏を呵し祖を罵るのだね。」

寧国寺さんは羊羹を食べて茶を喫みながら、相変ら

ず微笑してゐる。

五

富田は目を据ゑて主人を見た。

「又お講釈だ。ちよいと話をしてゐる間にでも、おや、又教へられたなと思ふ。あれが苦痛だね。」一寸顔を蹙めて話し続けた。

「なる程酒は御馳走になる。併しお肴が饅飩と来ては閉口する。お負にお講釈まで聞せられては溜まらない。」

主人はにやにや笑つてゐる。「一体仏法などを攻撃しはじめたのは誰だらう。」

「いや。説法さへ廃^やして貰はれれば、僕も謗法はしない。だがね、君、独身生活を攻撃することは廃^やさないよ。箕村の処なんぞへ行くと、お肴が違ふ。お梅さんが床の間の前に据わつて、富田に馳走をせいと儼然